

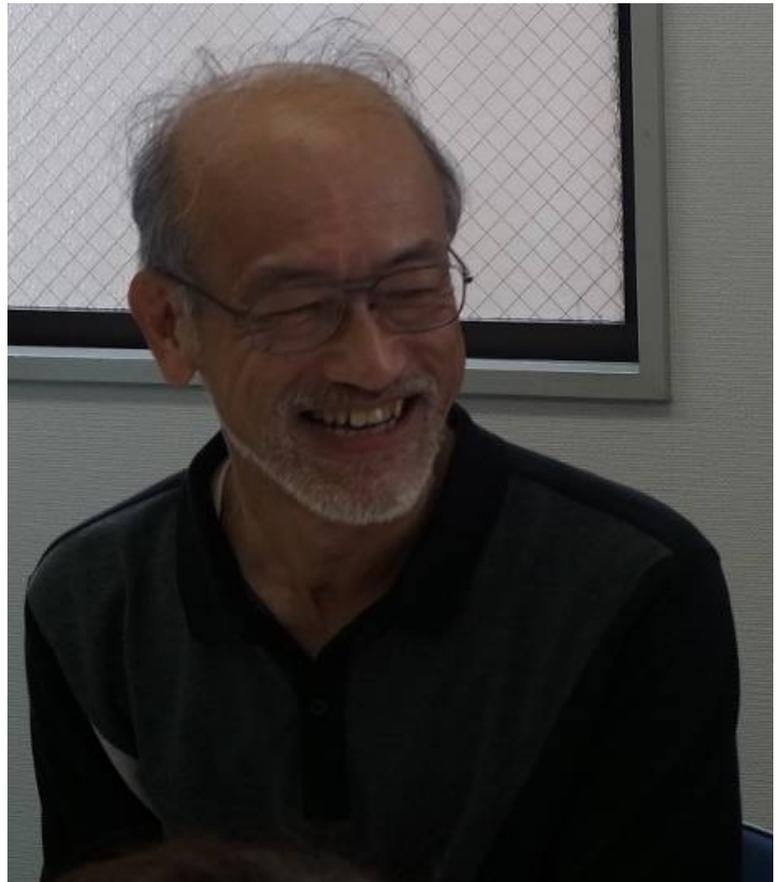


### I-OWA マンスリー・セミナー 講演: 宗教、道徳と経済行動

講演: 山口 勝業

海外の人と話をする機会が多いのですが、何年か前から、日本の本当の姿が正しく伝わっていないと感じるようになりました。日本人自らがもっと発信すべきではないか。そんな問題意識を持ちながら、まず日本人の経済行動の原点は江戸時代にあるという仮説を立ててみました。時代劇や落語を見聞きすると、親近感を覚えます。これが平安時代だと、ちょっと違うと感じるでしょう。そこで、江戸時代を穿り返すと、日本人本来の経済行動の特徴が見えてくるのではないかと考えたのです。

そもそも、何故、日本は、資本主義である程度、成功したのでしょうか。マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という有名な論文がありますが、そこでは、「資本主義が発達したのは主にイギリスを中心とした西ヨーロッパで、それはキリスト教のプロテスタンティズムがあったせいだ」ということが説かれています。一生懸命働いて行けば天に召される、だから一生懸命働きなさい。プロテスタンティズムの倫理というのは簡単に言えばそういうことです。一生懸命働き、倹約をすれば結果としてお金が貯まる。そのお金を人に施すことで天国に富を積むことができる。だから西欧にしか資本主義が発達しなかったというのですが、それでは日本の場合を説明できません。





## 長期投資仲間通信「インベストラ이프」

宗教と道德という関係で見ると、プロテスタンティズムという来世志向の宗教心があつて、自分が頑張れば自分にいいことがあるという利己主義の道德があるわけです。日本の場合はどうかと考えると、商売繁盛、家内安全といったご利益を願う現世主義が強い一方、かなり利他主義の部分があるように思います。

例えば、江戸時代に近江商人という人々がいましたが、近江という所は浄土真宗が盛んで、それをもとに商売道德が発達しています。他人にも、商売を通じていい製品を提供する、それによって他人が喜ぶ、それでお金を払ってもらう、だから自分も儲かる。これが近江商人のいう自利・利他円満の功德です。また、遡って江戸初期には鈴木正三(しょうさん)という人物がいて、「世法即ち仏法なり」、つまり世俗の職業に励むことが修行なのだと説いています。これは「プロテスタンティズムの精神」とそっくりです。

そのほか石田梅岩の「石門心学」や、富士信仰、株仲間ごとに定められていた神社と見ていくと、江戸期の日本の職業道德も、宗教をベースにしていたことが分かります。ただ宗教そのものではなく、色々な要素が混じって出来ているのです。

欧米では、キリスト教があつて、それに基づく道德があつて、それによって教育されて、人々の行動が出てくるという単純な構造なのですが、日本は複雑で、宗教も、土着宗教や仏教から民間信仰などが混じりあつて、なんとなく「ぼやっ」と宗教みたいなものがあるのです。道德の方は、江戸幕府が朱子学を輸入して官学と定めた時に宗教色を抜いてしまい、それが道德教育に用いられるようになりました。しかし実際には、宗教に基づいた道德は、江戸時代にはしっかり根付いていたというわけです。

講演では、日本人の宗教観や、富士信仰について、また石門心学の普及活動や、寺子屋による庶民の教育について、さらに文字の統一や印刷技術と経済成長の関係にも話が及びました。

### 対談: アジア的な感性を投資に生かす

山口 勝業、岡本 和久

岡本| 今から 10 数年前にインドの占星学者にあなたの天職は「貿易」だと言われたことがあります。私はその当時、年金運用を行う会社の社長でした。「貿易」とは関係ない、その時は、



## 長期投資仲間通信「インベストラ이프」

「占星学は当てにならないな」とちょっと思ったものです。でも、よく考えてみると海外の優れた運用技術を日本に導入するという意味では「輸入なのかな」と思っていました。最近、私自身も「和風資産運用」の話をいろいろなところでしていますが、アジア的な感性を生かした資産運用という考え方はこれから輸出していくべきものではないかなと感じています。欧米的な資本主義、あるいは資産運用と言うものの、コンセプトが行き着くところまで行き着いてしまって、行き場を失ってしまっている傾向がある中で、和風だけとは言いませんが、アジア的な感性をどう生かしていくということが、資産運用の世界にとっても非常に重要なポイントではないかと思っています。二宮尊徳先生や石田梅岩先生が、世界の資産運用の教科書に載ってくるようになれば非常に面白いと思いますね。先ほどの山口さんのお話にありましたが、日本の現世志向に自利・利他主義がある。利他といっても、必ずしも、他人だけの為に行っているわけではなく、結果的には自分のためになるという考え方が根底にあります。また、現世志向が強いといっても、実はそこに「のれん」や「家」というコンセプトが入ってくると「永代」という発想がでてきて、むしろ来世思考という話が出てくる。日本的なものは、すごく広がりがあるのではないかなと思いますが、その辺りはいかがでしょうか？

山口| 今日の話は、便宜的に現世志向と来世志向と分けたわけです。三井家に「町人考見録」という家訓があります。これは三代目三井高房が、子孫のために書き遺したもので、当時、京都の三井家周辺で商家や両替商をやっていた人達が破産していく状況をケーススタディーとして書き記しています。これをよく読むと、今でも通じる内容ですね。自分の代だけで金儲けをするのではなくて、三井家が子孫



代々まで続くようにする。子供に財産を譲る時も、自分の家を存続する為に、「この財産はお前だけのものではない。これは三井家全てのものだから、自分だけでは使ってはいけないよ」と伝えます。そして跡継ぎは、血縁関係のある自分の直属の子供でなくていいわけですね。自分の家のブランドを守る為に、実の息子がバカ息子だったら首にして、二代目は頭のいい子を養子に迎えマネジメントさせる。だから、三井家を始めとして日本の江戸時代から続いているところは、養子が多いのです。出来のいい人を雇い入れて番頭まで育てあげて養子にして次の代を任せる。

岡本| 「のれん」という考え方ですね。今で言うとサステナビリティを非常に重視していた。そういう意味では、現世も来世も自利も利他も全部融合しているところが日本的なマネジメントだ



## 長期投資仲間通信「インベストラ이프」

と感じます。

山口| 外人ファンドマネージャーが日本の企業に対して、「なんで儲からないのだろう。日本の企業は ROE が低すぎて、グローバルスタンダードに達していない」と言います。でも、江戸時代の文章を読むと、「そんなに儲けなくてもいいから長く続けなさい。」と書いてあります。つまり今で言うと「ROE は低くてもいいから、キャッシュフローのデュレーションが長い方がいい」というわけですね。この間、ある外人が来た時に「ROE が 15%とえらく儲かっていると言っているけど、この会社は10年続くの？日本のこの会社はROEが5%かもしれないけど300年続くよ。どちらがいい？どちらの時価総額が高いと思う？」と、問いました。続く方がいいですよ。

岡本| 結局、その辺の価値評価をどう株価に反映させていくのか。日本の投資家が自分達の価値判断で株価評価をしていくべきですよ。ただ、経営を何も変えないでやっていけばいいというの、また、間違いの部分もあります。構造変化に即応しないで同じことをやっていたのでは潰れていくかもしれない。会社をいかに上手く変化させながら、そこそこの収益を上げ続けるというのが、日本的な経営のエッセンスだという気がします。もうちょっと日本の投資家が日本人の価値観での価値評価を、株価に反映させるようになってもいい気がしますね。ただ、外人が買うから一緒に買うとか、外人が売るから下がるとか、円高だから下がって、円安になると上がるというのは淋しい気がしますね。

山口| 市場システムが上手くいく為には、すごくたくさんの条件が揃わなければ上手くいきません。最近のグローバル化の話の中で市場原理主義が全ていいと言われますが、モノの値段がちゃんとついている市場はすごく稀で、ごく一部のものしかありません。絵画なんか特にそうで、値段があつてないようなものですよ。世の中のものは市場があるように見えても実際にはないのです。市場が機能するものは、標準化されたごく一部で、たくさんの参加者がいて、毎日取引があるという類のものしかないですね。市場が機能するようなものは、コンセプトとしてはあるけれど、本当に上手くいくのはごく一部です。徳川吉宗の時代に、物価が上昇しているのに、米の値段は下落するという事態がおきました。当時は、米を売って物を買うので、米の値段は低いのに物価が上がっては困ってしまいます。そこで、商品の流通価格を統制をさせる為の組合を作らせました。これが「株仲間」です。市場経済ではなく、業種ごとに組織だつて独占的に市場外の組織を作り、ここで価格をコントロールしようとしたわけです。つまり談合ですね。ただ、そういう特権を持っていると価格を自由に設定できるので、また値段が上がり始めてくると、今度は後の将軍が「株仲間が値段を吊り上げているに違いない」と、株仲間禁止令を出しました。しかし、完全に自由競争の市場になると、クオリティーが落ち、欠陥商品がでてくる為、統制がとれなくなってしまいます。市場があれば、正しい値段で、いい商品が供給できるわけではないのです。もしかすると株仲間の方が上手くいったのかもしれない。



## 長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本| 堂島の米相場は、相当、効率性が高かったですよね。

山口| 当時のデータを検証すると、コンピューターがなかった中で、先物と現物の値段がきれいについていたわけですよ。これはすごい。外人に「デリバティブの市場は世界で日本が最初だぞ。俺はそのデータを持っているんだ」と自慢しています(笑)。

岡本| インターネットも電話もない時代に、価格情報があつという間に日本全体に広がったわけですね。効率性の高い市場が存在することは非常に重要であることは言うまでもありません。しかし、また、最近は株価の動きにみんなが一喜一憂しすぎている感じもします。その点で、ミュージックセキュリティーズの出資やエンジェル投資は面白いと思いますね。株価がないから持っているだけで嬉しい投資家しか買わない。市場に上場していませんから、株価が暴落しても関係ありません。一般的にエンジェル企業に投資する人は、その人が現役時代にやっていたことに関係した若い企業に、退職金の一部を投資して、1か月とか2か月に一回程度、その企業を訪問してアドバイスを与えるケースなどが多いと聞きます。投資家としては、これが楽しくて、それもリターンの一部ともなるわけです。ミュージックセキュリティーズの被災地ファンドというのは、寄付と出資を合体して出しているの、これもおもしろいスキームですね。最近思うのは「貯蓄から投資へ」というよりは、「寄付から投資へ」という方が本質に近いのかなと感じます。でも、みんな流通市場に余りにも囚われすぎてしまい、一喜一憂していますが、基本的にはいかにお金を用立てるかということですからね。いろいろな意味で資本主義、マーケット、市場主義的なものに対する見直しが、日本だけじゃなく、世界的に大きな課題となってきたと思います。アジア的な感性も含めた新しい概念が、世界に知られていくといいなと思います。今日はありがとうございました。